

【使徒書日課】ヤコブの手紙 2章1～9節

1わたしの兄弟たち、栄光に満ちた、わたしたちの主イエス・キリストを信じながら、人を分け隔てしてはなりません。2あなたがたの集まりに、金の指輪をはめた立派な身なりの人が入って来、また、汚らしい服装の貧しい人も入って来るとします。3その立派な身なりの人に特別に目を留めて、「あなたは、こちらの席にお掛けください」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこに立っているか、わたしの足もとに座るかしていなさい」と言うなら、4あなたがたは、自分たちの中で差別をし、誤った考えに基づいて判断を下したことになるのではありませんか。5わたしの愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。6だが、あなたがたは、貧しい人を辱めた。富んでいる者たちこそ、あなたがたをひどい目に遭わせ、裁判所へ引っ張って行くではありませんか。7また彼らこそ、あなたがたに与えられたあの尊い名を、冒瀆しているのではないですか。8もしあなたがたが、聖書に従って、「隣人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なことです。9しかし、人を分け隔てするなら、あなたがたは罪を犯すことになり、律法によって違犯者と断定されます。

【福音書日課】ルカによる福音書 16章19～31節

19「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。20この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、21その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。22やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。23そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。24そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』25しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きていた間に良いものをもっていたが、ラザロは反対に悪いものをもっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。26そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たち

の方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ること  
もできない。』<sup>27</sup>金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。わたしの父  
親の家にラザロを遣わしてください。<sup>28</sup>わたしには兄弟が五人います。あの  
者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせて  
ください。』<sup>29</sup>しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセ  
と預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』<sup>30</sup>金持ちは言った。『いいえ、  
父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってや  
れば、悔い改めるでしょう。』<sup>31</sup>アブラハムは言った。『もし、モーセと預  
言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、そ  
の言うことを聞き入れはしないだろう。』』

## あなたも良い席へ！【こども説教のために】

今日は「世界聖餐日」の礼拝ですから、皆さんをできるだけ良い席にご案内  
いたしましょう。それは、聖壇の中央に置かれた「聖餐桌」に手の届く席  
です。この「聖餐桌」に運ばれてくる「パンと杯」を取って食べ、飲むこと  
のできる席が、皆さんにご案内する最上の席です。

主イエスと食卓を共にした弟子たちは、主イエスが裂き分けてくださる「パ  
ン」を食べ、祝福してくださる「杯」を回し飲みしました。弟子たちの教会  
は、主イエスを記念する食卓には主イエスが共にいてくださるということ  
を信じて、「主の食卓」を囲むようになりました。主イエスがしてくださったよ  
うに、食卓で「パン」を裂き分けて食べ、「杯」を祝福して回し飲んだのです。  
教会が世界に広がると、それぞれの教会で「主の食卓」が囲まれました。教  
会は別々でも、同じ「主の食卓」を囲み、主イエスの裂き分けてくださる「パ  
ン」を食べ、主イエスの祝福してくださる「杯」を回し飲みしていると信じ  
て、そうしてきたのです。それは、教会で「聖餐」とか「聖体拝領」と呼ば  
れる儀式として受け継がれてきました。

この「主の食卓」に、皆さんをご案内したいのです。どなたにも、この食  
卓から「パンと杯」を取って食べ、飲むようになっていただきたいのです。  
そうすることで、主イエスが食事の席でお教えくださった「神の国の食事」  
を世界中の隅々まで実現するという働きを、一緒に担う仲間になっていただ  
きたいのです。

「主の食卓」には、すべての人が招かれています。だれもが、もっとも良  
い席をすでに用意していただいています。すべての人の席があるのです。

皆さんのために用意された良い席にご案内しましょう。慌てなくても、そ  
の席が他の人に取られてしまうことはありません。あなたが着かなければそ  
の席は空いたままですが、天の御父は、席が埋まることをお望みなのです。

## 「宴席」に招かれているのに！

教会は、残念ながら、ある時代に「主の食卓」を共に囲むことのできなくなるような分裂を経験してきました。いまだに、その分裂の傷が修復されていないところがあります。その傷が癒され、すべての教会が「主の食卓」を共に囲むことができるようになることを願って、80年ほど前に「世界聖餐日」が制定されました。今も続いているのは、まだすべての教会が「主の食卓」を共に囲むことができるようになっていないからです。

安息日の食事の席で、「たとえ」を用いて教えてくださった主イエスのことをあざ笑う者がありました（ルカ 16:14）。彼らは、食事の会に招かれてきてはいましたが、主イエスを遠巻きにして様子をうかがっていたのでしょうか。

主イエスの着かれた席には、代わる代わる近づいてくる者たちがありました。挨拶にくる者、議論を仕かけようとする者、主イエスの語られることを聞こうとする者、等々。その中に、主イエスの友人ラザロもいたのかもしれませんが。

想像してみましょう。ラザロは、できものだらけの貧しい風体で、どういうわけか横たわりながら犬と戯れているのです。普通には振舞えない事情がラザロにはあるのかもしれませんが。その彼が主イエスの傍らにいたのは、主イエスが彼に対して特別な愛を向けられていたからです。「イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」（ヨハネ 11:5）と伝えられています。ラザロは病気だったのです。ラザロの二人の姉妹は、彼の世話をするために、結婚もせず、弟と共に生活をしていたのです。その三人が、いつから主イエスと知り合いだったのかは、わかりません。けれども、この三姉弟に、主イエスは特別な愛を向けられていました。憐れみを注がれていました。ラザロを、あるいは三人を、ご自分の宣教の旅に伴われることもあったのかもしれませんが。そして、安息日の礼拝と食事の席にも、主イエスは、ラザロを伴われていたのでしょうか。

ラザロのような者は、安息日の午後に金持ちの家で催される食事の席に、必ずしも歓迎されないのです。忌み嫌う者もいたのかもしれませんが。「あのような者と同じ食卓を囲みたくない」と、露骨に席を外す者もいたでしょう。そのような者たちの中に、「高みの見物」で主イエスの様子をうかがい、その教えをあざ笑う者がいたのではないのでしょうか。

主イエスがお語りになられた「金持ちとラザロのたとえ」は、そんな彼らに対する皮肉を込めて語られたのでしょうか。ラザロは、どんな振る舞いをしていても、主イエスと宴席を共にしているのです。それに対して、彼らは、宴席に加わることを自ら拒むばかりか、ラザロを主イエスの宴席から引き剥がそうとさえしています。しかし、それは虚しいわ言なのです。

## 分け隔てなどしてられない！

弟子たちの教会が歩み始めた時代、彼らの教会の中に露骨な差別があったのでしょうか。「主の兄弟ヤコブ」が記したとされる「ヤコブの手紙」が、たとえで描いてみせている教会の集まりでの様子は、確かに少し誇張が過ぎるものだと思います。いくらなんでも、このようなことが露骨に行われていたとは思えません。それよりも、仮に「金の指輪をはめた立派な身なりの人」が教会にいたとしても、その人自身がこのような特別扱いを望むことがどれほどあったといえるのでしょうか。

かつて「日曜日の晴れ着」という言葉がありました。日曜日の教会には、特別な晴れ着ともいえる装いで集う習慣があったのです。それは、裕福な人々の間だけで行われていたことではありません。貧しくても貧しいなりに、日曜日の一日は、神の御前に進み出る特別な日として、また教会の人々の集まりに加えられる晴れの日として、特別な装いで臨んだのです。

わたしは知りませんでしたが、わたしが生まれ育った教会にも、そのような習慣があったようです。わたしは青年時代、T シャツにジーンズ、裸足のままでスニーカー履き、というような装いで平気で教会に通っていました。忘れもしない神学校に入学する前の秋の日、教会で「ママ先生」と呼ばれていた婦人の隠退牧師に唐突に声をかけられ、「今の人はいいわね。そんな裸みたいな恰好で教会に来られて」と言われたのです。そのときは、皮肉を言われたぐらいにしか受けとめませんでした。その婦人隠退牧師がわたしの神学校編入学試験の日亡くなれると、あの言葉は伝道者になろうとするわたしに向けた彼女の遺言であったのだとしか思えなくなりました。

前任地教会に、必ず土曜日に美容室で髪を整えて日曜日に備えているという高齢のご婦人がいらっしゃいました。彼女に倣って同様の備えをして日曜日の教会に来られる方が、少なくありませんでした。日曜日の教会に着飾って出向くのは、自分を誇示するためではなく、神に対する敬虔と教会の仲間に対する敬意からなされることなのだ、と教えられてきました。

主イエスに導かれて神の招きに応える一人ひとりの応え方があります。そのすべてを受け入れる「神の国の食事」というあり方を、わたしたちは、主イエスから、また弟子たちから、受け継いできました。

分け隔てなどしてられないのです。一人ひとりがそれぞれに、神の招きに誠実に応えることを願っているからです。互いを尊ばずにられないからです。だから、目の前の「食卓」に近づき、共に手を伸ばして一つの「宴席」にあずかっていただきたいのです。そこで、神の御業を祝い、互いの存在を喜び合う交わりを知っていただきたいのです。

「神の国の宴席」には、すべての人が招かれているのです。